

英語落第記

まつい たいご
松井 大悟

田川市下水道推進課
参与(前本誌監修委員長)



英語に対する劣等感

平成6年11月、建設省を退職した後、当時の事情で再就職まで約1年間浪人できることになり、かねてから念願を実現することにした。英語圏外国のホームステイである。

英語に対する劣等感は大学卒業後30年間いつも抱いていた。いつの日か英語で自分の気持ちを伝えたい。いつの日か相手が何を言っているのかかわりたい。この気持ちを抱きながら、自分で少しは努力をしたのだが、いつも竜頭蛇尾に終わっていた。相手の話を解たかったふりをしたり、冗談で周囲が笑っているのに理解できない状況には別れを告げたかった。

英語ができない理由の一つに、英語に囲まれて生活したことがないことを、言い訳の理由にしていた。このため、年はとったがその環境に身を置けば、必ず克服できると確信し1年間の期間を利用してホームステイをしてやろうと決心をした。

1単位不足で落第

英語の苦い思い出は大学の落第から始まる。昭和35年9月某日、私は福岡市西南にある花田先生の自宅にサッカー部友人の片多と向かっていた。その日発表された先生の英語の追試験

で、私は不可をとった。この英語1単位の不足により、教養学部から本学部(工学部土木工学科)への進学が出来なくなり落第が決まったのである。

当時、教養学部1年半で必須を含め70単位が進学に必要であったが、私は麻雀のため30単位しか取得していなくて、9月の試験期は超繁忙となった。4年の卒業までに取得を繰り延べられる単位と、追試験をしてくれる先生の試験はすべて白紙で出し、他の必須の単位を優先して試験を受け、残りを追試験にかけ、ようやく40単位を取り、花田先生の英語が合格すれば進学となるまでこぎつけたのである。

花田先生は福岡学芸大学の教授で年配の先生だった。友人の片多は西南学院大学教授の息子で、よく落第寸前の生徒が自宅に来て親父に陳情する現場を見ていたから、年配の先生なら何とかなる、とにかく先生の家に行けといひ、付き添ってきてくれたのである。

先生の玄関をノックすると、奥様が出てこられて、「申し訳ありません、会わないといっています」こちら必死で「何とか会わせてください」と頑張る。中に立たれた奥様は困惑されて「あなた会うだけでも会ってあげたら」との声が聞こえ、奥様が玄関を開け、腰かけることができた。30分もたったころ奥様のとりなしでようやく先生の座敷までたどり着くことができた。

先生は当然非常に怒っておられ、私のお願いの言葉も終わらないうちに、お前の追試験の点数は40点なので駄目だといわれた。さらに私の答案を見せ英語力のなさを指摘された。「私は田舎の出身なものですから、あまり英語に接する機会がないのに、その私が40点も取ったのですからもう一度再々試験をしてください」「まったくこんな語学力のない学生を入学させることが問題だ。ところでその田舎はどこかね」「はあ、田川市です」「ほう、田川かね。私も学芸大田川分校に長く勤務したよ。田川じゃ無理もないか」。しばらく田川の話をした後、先生は急に真面目な顔を私に向け話し始めた。この時。私は100%進学を確信した。

「私は、落とすための試験をしてきたことはない。追試験は出来るだけ易しくしたつもりだ。それでも君は半分もわかっていないし、英語の基礎も出来ていない。そのような君に合格点を与えることは出来ない。これは教育者としての信条だ。私は30数年間教師として過ごしてきた。私の教育人生も残り少ない。この信条を曲げさせないでくれ。私の1単位で君を落第させるのは忍びないが、君もこの機会を試練と受け止め、1年間英語を勉強し、再出発してくれ。お願いだ。」

奥様の「すみませんねえ」の声に送られ、慰めてくれる友、片多と夕暮れ



クラスメイト スイスの美人



クラスメイト 普通クラス

が濃くなった道を西新駅までとぼとぼ歩きながら、私は本当に1年間英語を勉強しようと思った。しかし、現実の誘惑はあまりにも強かった。なにせ1年間で1単位をとればよいという気持ちで、また麻雀と酒の世界へ戻ってしまい、放蕩の1年間を過ごしてしまった。建設省に入った後も、外国留学試験に落ち劣等感が高まるばかりだった。

英語ホームステイ。またしても落第

ホームステイは豪州シドニーで1ヶ月間（平成7年4月～5月）とした。当時豪ドルが安く1ヶ月のステイ料金が2食付で学費を含め15万円くらいだった。

入学後クラス分けの試験によるクラス分けがあった。試験は筆記が中心でほぼできたような気がした。その結果、私はなんと最上級クラスのケンブリッジコースに入れられた。このコースは学校に1クラスしかなく、内訳はスイス4人、韓国3人、インドネシア1人、日本人私1人の9人だった。女性が5人、男性4人。私以外はすべて22歳以下だった。

中学入学以来40年間英語を学習してきた結果が出たのかなという思いはあったが何か不安だった。この不安は的中、翌日からのコースについていけなくなった。先生の言葉は半分くらいしか解らなかったが、教科書中心の時は

なんとかついていけた。フリーの時間になり教材に使用される映画のビデオやCDの時間になるとお手上げだった。ウォーキングウーマンの映画を見せられ、女優のセリフの一部が消されているペーパーを渡され、消されている箇所を聞きながら埋める。歌を聴きながら同様に歌詞を完成させる。悲惨なのはディベートの時間だ。二人で例えばホテルで部屋の予約条件に違うとしてクレームをつける役とホテル側の人の役でディベートし、料金を交渉する。私はスイスの女性と交渉しあったが、それまで可愛い人が一変し、表情を変えてクレームをつけてくる。西欧人の表現力に圧倒され何も言えない。スイス人のたった一人の男性ニックはとても優秀で、映画は聞いているだけで大半を理解できる様子で、単語の語尾がerかorの違いを議論しているようすだった。レベルが違いすぎた。ニックはサッカーが好きで放課後プレーも一緒にした。クラスメートは皆親切でよく助けてくれた。1週間もたつと皆に迷惑をかけていることがわかり、担任のブレッドに相談しクラスを降格してほしいと相談すると、あっさりOKだった。落第である。

次週からは一般クラスに所属した。クラスは韓国6人、インドネシア3人、スロバキア1人、日本は3名だった。ほとんどが女性だった。

前日までのクラスが実生活への応用

とすると、今回は基礎的な感じなので何とかついていけた。それからは気楽な学生生活、単位取得の義務もなく落第もなく、ただ参加するだけでよかった。最年長者なので優遇され、先生と間違われることもあった。この学校は課外授業が活発で、午後からはパーティ、スポーツ、市内見学、映画鑑賞があり、週末はキャンプ、ラフティング、乗馬等が企画されほとんど参加した。学校に行くのはこれらの予約と情報集め、そしてサッカーのチームとの相談が主になり、英語の授業は週2～3回しか出席しなかった。また、豪州の水道協会に行ったり、シドニーの下水処理場の見学をしたり、キャンベラの日本大使館に建設省のアッタシェを訪ねたりもした。

ホームステイ先の家族

このほかに、ホームステイ亭主クリスとのゴルフを週に1回以上、クラス仲間ともゴルフをした。クリスはドイツ系白人、会計士で40歳くらい、ゴルフ好きだった。彼とのゴルフの縁は、シドニー初日の朝だった。シドニー空港に到着、ホームステイ先に11時ごろ到着。主人のクリス、奥さんのターニャに挨拶をし、私の略歴を渡した。12時ごろクリスが地下室からゴルフバッグを持ち出し、ゴルフに行かないかとの誘いがあった。趣味の欄にゴルフと書いたのを見